

大空 (生徒・保護者向け) 32号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和3年3月23日(火)

「分人」という考え方(3学期終業式)

□本日の概要

- 他者に調子を合わせている時、本当の自分ではないという感覚を持つことがあるが、それは人格は一つで分けることはできない、誰に対しても一貫した態度でいるべきだという人間観に囚われているからである。
- 「分人」とは、西洋の「個人」のように人格は分割できないと考えるのではなく、様々な人格の集合体が自分の姿であるという考え方である。
- 「分人」という考え方に立つと、好きな「分人」を通じて、自己を肯定的に考えることができる。
- 「分人」として多様なコミュニティに参加することができるようになり、社会の分断の克服につながる可能性がある。皆さんは多様な「分人」を育てて欲しい。

□コロナ時代のコミュニケーションのあり方

本日、3学期の終業式を迎えることとなりました。1年間を振り返ると、まさに新型コロナウイルスによって、社会が激変した1年間でした。昨年の今頃を振り返ってみると、2月27日に学校が突然臨時休校になりましたが、昨年の3月25日段階での東京の新規感染者は25人で、100人を超えたのは4月4日のことです。その後、4月16日に全国に緊急事態宣言が出るのですが、昨年の3月末頃の宮崎の感覚は、まだそれほど深刻なものではなかったのではないのでしょうか。1年後、社会がこのような形になっているとは想像できませんでした。

さて、新型コロナウイルスで大きく変わったのは、私達のコミュニケーションのあり方でした。直接会うことがはばかられ、マスク越しやオンラインによるコミュニケーションが増えたことから、他者とのコミュニケーションのあり方について、とまどった人も多かったのではないのでしょうか。

他者との付き合い方について、芥川賞を受賞した作家、平野啓一郎氏は、「分人」という興味深い考え方を提唱しています。私は、2019年に「分人」についての平野氏の講演を聞く機会があり、それまで引っかかっていた他者との付き合い方について、ストンと落ちる気持ちになりました。新型コロナウイルス以前から、私達にとって人間関係は大きなテーマですが、ウイルスによって直接の人間関係が阻害されている今だからこそ、この「分人」という考え方を皆さんに紹介したいと思います。

□「キャラを演じる」違和感

皆さんは学校や家族などで、自分の居場所がないと感じたことはありませんか？あるいは、他者と付き合いの中で、他者に調子を合わせているのは嘘の自分で、本当の自分ではないと、思い悩んだことはないのでしょうか。最近では「キ

ャラを演じる」という言葉がありますが、他者に調子を合わせている自分に、多くの人が何か無理をしている感覚を覚えるようです。

実は、このように、他者とのコミュニケーションで違和感を感じることは誰でもあるのです。いわゆる「人付き合いがうまい」と言われる人は、良い意味で、「適当」な距離感を保つことができている、日常ではあまり違和感を感じないのだと思います。

逆に、「人付き合いが苦手」というタイプの人は、この違和感を比較的強く感じる人ではないのでしょうか。私達はこのような時、自分の状況を、仮面モデルで考える傾向があります。

仮面モデルの人間観に立つと、私達は他者に「本当の自分」を見せず、仮面をかぶって人と接しており、相手に応じて仮面を取り替えていることとなります。つまり、「本当の自分」は、仮面の背後に存在しているということになります。私達は幼い時からお面に接しており、遊びやお遊戯で、お面を付けることで、普段の自分と違う役割に変身するという感覚を体験しています。比喻としても大変分かりやすいためか、私達は無意識のうちにこの考え方に支配されがちです。

しかし、このモデルだと、仮面を取り替えている自分は、他者を欺いている自分ということになります。いわば嘘をついているわけで、罪悪感を覚えてしまいます。また、自分と接している相手も仮面の姿だと考えると、人間関係が仮面と仮面のだまし合いのような、空虚なものに見えてきます。しかし、考えてみれば、友達や家族と楽しく過ごしている時が、まったくの虚構かと考えると、そうではないはずです。また、他者と接せず、一人で自室に籠もっている時だけが、仮面を脱いだ本当の自分かと言われたら、そうではないでしょう。つまり、他者に応じて仮面を付け替えているという比喻は大変分かりやすいのですが、その考え方に立つと、仮面の背後にある「本当の自分は何なのか」という苦しみに陥ることになるのです。

□分人という考え方

近代以降、多くの人が、「本当の自分」とは何か分からなくなっています。(近代に入り、このテーマに取り組んだのが、夏目漱石です。ぜひ漱石を読んでください。)

平野氏は、私達が仮面モデルに陥るのは、私達が「個人」という考え方、すなわち人格は一つで、分けることはできないという人間観に縛られ過ぎているからだ指摘しています。確かに、私達の文化には、自分の自我が一つであることを理想とする傾向があります。「態度に裏表がある」という表現は悪い意味で使われますし、「本音と建て前」の使い分けも、あまり良く思われていないようです。つまり、どこにいても、誰に対しても、一貫した態度で、ありのまま

まの自分で行動できることが、理想であり、本当の生き方であり、誠実な人間であり、正しいことだとインプットされているのです。しかし、その考え方が、近代以降、私達を縛ってきたのではないかと平野氏は指摘しているのです。

平野氏によれば、「個人」という考え方は、明治以降に日本に広まった考え方で、これは英語のindividualの翻訳です。individualはdivide（分ける）という動詞に由来するindividualに否定の接頭辞inがついた言葉で、「分けられないもの」という意味であり、それが近代に入って「個人」という意味になりました。

西洋のindividualは神に対する概念です。キリスト教では神は一つであり、それを信じる人格と、別の神を信じる人格が一人の人間の中に同時に存在することを否定しています。一つの神に対応する、最小単位としての人間が”individual”であり、これが「個人」という意味になったようです。

この考え方が、西洋から日本に輸入されましたが、考えてみれば、日本にはもともと一神教の考え方はありません。日本はそれぞれの場面に応じた柔軟な対応をするのが日本の文化でした。西洋から輸入され、明治以降に広まった「個人」という考え方では、もともと日本に存在していた人間観をうまく表現できていないのです。

そこで、平野氏が考えた言葉が、西洋に由来する「個人」に対応した「分人」という言葉です。中心に「本当の自分」があるのではなく、様々な人格、すなわち「分人」の集合体が本来の人間の姿だと平野氏は主張しています。

平野氏は、「本当の自分」を、分数の足し算のような比喻で説明しています。ジグソーパズルのピースのようなものと例えても良いでしょう。ピースの大きさには大小があり、大きなピースが本当の自分という訳ではありません。友達と接する自分、家族と接する自分、先生に接している時の自分、ペットと触れ合っている自分、ネットの世界にいる自分と様々な自分がいて、そのどれかが正しいとか正しくないではなく、様々な集合体、様々な顔があるものが「自分」だということです。

口分人という考え方の必要性

どうして「分人」という考え方が必要なのでしょう。私達がこの世界を生きていくには、自分を肯定しなければなりません。しかし、人は自分をまるごと好きになることはなかなか難しいのです。不得意分野は誰でもあり、そのことは人を苦しめます。例えば、私は、幼い頃から勉強（特に数学）や運動が苦手であることに苦しんできましたので、コンプレックスの塊でした。運動も嫌いでしたが、運動ができない自分も嫌いになるのです。平野氏もそうだったようですが、中・高校時代、「自分のことを好きではない」という感情を強く持っていたと思います。自分を嫌だと思っている時は、他者から、「自分を好きになりなさい」と言われても素直に受け止めることができませんでした。

そこで、平野氏が提唱するのは、「分人」ごとに好き嫌いを考えてみる考え方です。例えば、運動をするのが得意でない自分は嫌だが、スポーツチームを応援している自分は好きになれるとか、大勢の人と一緒に自分はあまり好きになれるが、おかあさんと一緒に自分は好きになれるというように、場面ごとに分けて考えるのです。「トータルな自己でなければ人として正しいあり方ではない」という考え方と比べると、自己の人格の全否定をすることはなくなる

のではないかとというのが平野氏の主張です。

平野氏はこう語りました。

例えば、自分の死ぬ時を考えてみよう。自分が死ぬ間際、自分の人生がどんな人生だったか、どんな「分人」だったかを考えてみる。いやだった体験をなくしてしまうことは難しいが、振り返った時、幸せだ、楽しかったと感じる「分人」の自分を増やすことが幸せにつながるのではないかと。

また、高校時代は可能性に満ちている。自分の友人たちも、高校時代とはまったく想像できなかったような生活を送っている。現在、楽しい、楽しくない、様々な状況があるだろうが、自分の良い「分人」は無限に増やすことができる。

日本はこれから難しい時代に入っていく。職業を考えてみても、どの仕事がロボットやAIに置き換えられるか分からない。どんな能力が必要なのかも分からない。おそらく、温暖化はいっそう進むだろう。人口減少も確実である。多くの深刻な問題が起きるだろうが、人間の自由とは、好きな「分人」を好きなように生きることであり、それはこれからも変わらないだろう。

平野氏は、さらに、「分人」による社会分断の克服の可能性を指摘しています。今までの「個人」という考え方では、一人の人間が考え方や立場の異なるコミュニティに参加することは首尾一貫しないことであり、矛盾することでした。どのグループに属するかを求められ、複数のグループと付き合うと裏切ったと見なされることもあります。しかし、「分人」という考え方に基づけば、複数のコミュニティに参加することが可能です。むしろ、これからの時代は、まったく矛盾するコミュニティに参加することが重要になってくるでしょう。

今、社会で、様々な分断が問題になっています。個人としてコミュニティに参加している以上、コミュニティ同士の対話しか融合の手立てはなく、それは簡単なことではありません。しかし、「分人」として複数のコミュニティに参加していると、それぞれのコミュニティで、自分の別の分人の要素が現れ、そのコミュニティに影響を与え、コミュニティ自体が変化する可能性があるのです。

「本当の自分」など存在しない。対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。他者と共に生きるということは、無理強いされた「ニセモノの自分」を生きることではない。

この平野氏の主張は、唯一の「本物の自分」探しに翻弄されてきた私達に、新たな視点を与えてくれるものではないでしょうか。

私は、ことあるごとに、皆さんに、勉強以外の目標を持つことや、自分の興味・関心のチャンネルを増やすことの重要性を話してきましたが、実はこの「分人」の考え方に基づいています。「分人」という考え方については、平野氏の著書がありますので、興味を持った人は、是非、本を読んでみてください。

春休みは、来学期への充電をする期間です。皆さんそれぞれの中に、多様な「分人」の種をまき、新学期から育てていって欲しいと思っています。

○参考文献

『私とは何か 『個人』から『分人』へ』
(平野啓一郎 講談社学術新書)